

# 琉球大学学術リポジトリ

原稿：『植民及植民政策』 第三章  
植民の動員二、三節

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2018-04-16 キーワード (Ja): 矢内原忠雄 キーワード (En): Yanaihara Tadao 作成者: 矢内原, 忠雄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/38344">http://hdl.handle.net/20.500.12000/38344</a>

# 矢内原忠雄文庫

史料名	原稿『植民及植民政策』第三章 植民の動員二、三節(植72～植82)
封筒番号	438
原文所蔵者	琉球大学附属図書館
撮影年月日	平成17年11月18日
撮影者	富士写真フイルム 株式会社
備考	

# 矢内原忠雄文庫

封筒番号：438

史料名	原稿『植民及植民政策』第三章 植民の動員二、三節(植72～植82)
資料形態	B4原稿用紙
枚数	11
页数	11
縦 (cm)	
横 (cm)	
厚さ (cm)	
書誌的事項	植民 『植民及植民政策』の原稿と思われる。  今泉分類記号：Y

説明  
ターゲット

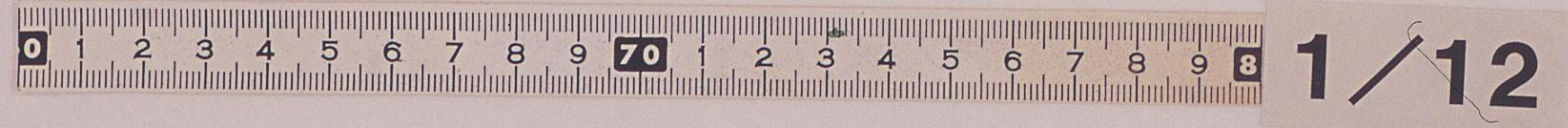
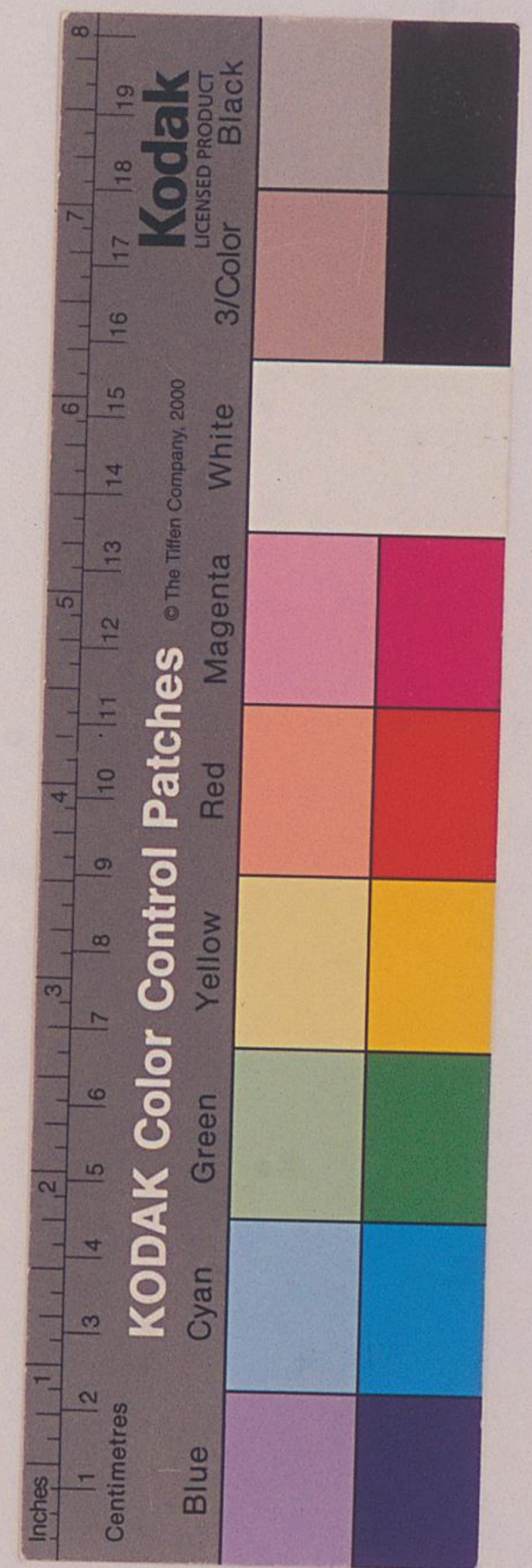
この原本  
は、破損の  
まま撮影し  
ます。

22 植 72

は 絶 對 的 に 必 要 な 事 物 だ け で 是 上  
 り、 土 地 希 缺 の 所 産 を 増 進 す る 上  
 と 云 ふ こ と は 本 来 積 極 的 美 事 で 是  
 「 自 然 の 順 序 を 追 っ て 人 口 が 増 加 す  
 す。 マ ル サ ス 自 身 も 言 っ て 居 る、  
 増 加 率 より も 大 なる 傾 向 あり と 為  
 身 生 活 資 料 の 増 加 率 は 却 っ て 人 口  
 ツ ペ ン ハ イ マ ー は 人 口 増 加 に 伴 っ  
 べ ま じ ゃ と、 反 向 せ ん 人 も 亦 あり 得  
 る。 「 諸 君 も 神 は 一 口 と 共 に 一 對 の  
 手 を 與 へ 小 と 云 ふ に 亦 あり 得  
 は 易 し も 増 加 せ る 人 口 は 之 に 比 例  
 し て 生 産 額 を 増 加 し 得 ば 理 由 あり  
 加、 同 時 に 又 生 産 者 の 増 加 あり  
 人 口 増 加 は 消 費 者 の 増 加 あり  
 技 術 上 の 改 良 進 歩 が 遂 行 せ 得  
 条件 である。 之 により 分 業 進 歩  
 人 口 増 加 は 生 産 増 加 に 必 要 なる  
 白 である。 然 ら ば 是 上 の 事

1) Cannan, E. Wealth. P.59. 伊藤 眞雄 訳、富 P.105 Cannan, Theories of Production and Distribution. P.139 以下参照  
 2) 同上書 P.60. 伊藤 眞雄 訳、P.106-107.  
 3) Elster Oppenheimer, F. Das Bevölkerungsgesetz des T.R. Mal'us u. d. neuere Nationalökonomie. (Elster 前出書 S. 794-796 以下)

ATHENA (4)



73 植

工業に於ける  
収穫逓減

の上は一人当りの生産増加量は減少する。何  
れより多くの労働者の賃金は如く工業の収穫逓増  
法則を行はるゝまゝは、或は農業の生産に於  
て見る不利益を償ひ得るであらう。何と云へ  
ば生活程度が向上し果して現存に於ては、マ  
ルサスの人口説を擁護し、人に  
對して生活資料(一切の必需品便宜品)の關係  
に於て人口過剰論を論ずるに至るとするが  
故である。然るに私はキヤナンと共に、工業  
の豊制限ある収穫逓増を眞理と思はない。「人

れは私に法一に否定し、併し「人口論  
に對する限り」に於ては、或る層多く生産  
し得るか否かは少くも問題ではなく、殆んど  
世に増加する人口と歩調を一にし得るか  
と土地を以て生産せしめ得るか否かといふこ  
とが問題なのであると云ふ。  
土地生産力に對する制限は實に存在する。  
耕地面積上の制限が其一であり、収穫逓減の  
法則は其二である。人口増加に伴つて農産物  
の生産も増加するが、最大収穫量に到達した

ATHENA (4) 1) 佐久間永新書 P 226 2) 同上 P 233-234 Ricardo 曰く「最も有利な条件下に於ては生産力は殆ど人口(増加)力の大  
小に依りて決定せしむる。然るに一方では人口(増加)力  
は常に目標に達する(Principles of Political Economy and Taxation, Gornell's Ed. P 76)。Mark 之を評して「最後の部分は地主の發明(Pflanzenerfindung)の產物(不在)に  
ある。人口増加力は常時生産力(増加)に伴つて減少する。(Theorie über den Mehrwert, IIter Band, 2ter Teil, S. 328)。併し Malthus の人口制限的 利益を

74 植

23

類は世に限り、小麦を生産し得るはかると同じく  
 又世に限り、キヤブコを生産し得るものではない。  
 。如何に多数の労働者かたに従事するも、或  
 量以上に生産すること不能なるべく、而して  
 其量に到達する途か以前に於て、増加労働の  
 各單位の生産し得べき<sup>キヤブコ</sup>増加量は減少し  
 始めるにあらざらん。収穫量の到達は農業に比  
 して遙かに遅いかも知らぬが、其の到達すべ  
 き事に於て差りはない。或る一定の時に於て  
 は、即ち知識及び事情に變化なき場合に於て

は、各産業は一定の最大収穫量を得し、而し  
 て若し人口が總ての産業をして其長に到達せ  
 しむるに足るほど多大な割合の場合には、然  
 らざる場合より収穫は少かるべく、而して  
 之が救済法は即ち人口の増加に在り、之に反  
 して人口が比喩をも超過する以上は大きな場  
 合に於ては、収穫は少かる場合に比して大張  
 り少かるべく、而して之が救済法は人口の減  
 少に在り、<sup>2)</sup>一つの口は二つの口を伴ふて社会  
 に来る時、<sup>3)</sup>後の場合に於て、或る社会が  
 耶路撒冷に於て、<sup>1)</sup>新しき口は在るに  
 と同量の食物を食ふも、野一き手は在るに比し同  
 量を生産せざる場合には、その社会より時期につ  
 き人口過剰が存在するものと云ふを得る。

ATHENA (4)  
 1) Cannan 前出書 P.68. 伊藤訳. P.122  
 2) 同上 P.69. 伊藤訳 P.124.  
 3) Mill, J.S. Principles. P.191.

科学の進歩

無住地の存在

或はいふであらう、「科学の進歩は無限であ  
り、少くとも人口と同進歩に増加する。；；而  
して科学に不可能なる何事があるか」と。科学  
の進歩は多くの驚異を成し遂げるであらう。  
併作の問題は或る時期に達するものであり、  
一定の技術と一定の生産量に達するものであり、  
ある。将来の知識及び生産の進歩に達  
しないのである。<sup>2)</sup>  
又或はいはん、「ミシシッピの谷に無住地が

十分存在せしめ、金銀の全人口を移植せし  
む得べきに至るまで、不足する無住地を包擁  
する限り、地球の僅か三分の一に漸く耕作地  
本に止る限り、たゞに止る限り、人口過剰  
に就て語るは笑ふべきことである」と。<sup>3)</sup> 併作  
の当面の問題とする要は一定の耕地上に  
ものである。何とせんか、私が長々と人口  
過剰に就て述べしは、その社会の移住の動因  
としてこの実情に於てあるから。<sup>4)</sup>

併に於ける人口過剰も亦實在し得るものと  
言はぬはなからず。

75 植

ATHENA (4) 1) Engels, F. 前出書 (Drehl u. Mombert. Lesestücke. 前出. S. 224-225)  
2) Bonar. 前出書 P. 89-91.  
3) Engels. 前出書 S. 225.

26

76

指前  
外

4) マルサスはいふ。「地球の生産力は絶対的に有限である。従つても私達の議論は一毫の  
 微も其の量を減じない。何故なら其れは全く人口と富物の増加率の差が生ずるに  
 依る」。—— 佐久間 汎 P. 234.



27

77

人口過剰の作用

三二八

一定の社会、一定の時に於て、即ち皆つゝ  
 小なる生産の経済的技術的關係、生産及び分  
 配の法的秩序、並に生活程度の標準に於て、  
 終局的には生活資料、（併作ら）現代の強行阻礙に於て  
 は、（直接には）労働の需要に對し、（即ち生活維持の材料に對し）相對的なる人口過剰が  
 存在し得る。それは社会群の生存若くは生活程  
 度の水準維持に對する壓迫を意味する。人の  
 生存はこの壓迫に屈從せらるゝと欲する。而  
 して之を避くるの途は生産の増加（某は事業）及び人口

の減少の外にない。人口過剰の勢が感ぜらる  
 るや、耕地の擴張改良や農村振興策のとり  
 、又は（外國貿易）、（發達其他商工政策によりて）  
 食糧其他生活資料の増加を以ては、前者であ  
 り、而して後任植民は後者である。（ある一つの位置の工業地帯）  
 人口過剰は一向抽象的概念である。（ある）  
 實の植民の動向として作用すべき現実の事情  
 は種々異なりある。狩猟牧畜の民に對し  
 ては地域の相對的狹隘そのものが植民の抑  
 節因として作用した。旧約聖書創世記に記さ

人口過剰の植民  
 の動向として作  
 用する直接  
 の事情  
 狩猟牧畜民  
 地域の狹隘

ATHENA (4) 1) 河津博士は曰く、「最近にいはし時は一國が人口過剰なりといふは其國が百方術を講じて其國民をして生活上困難なからしめんとするに力をつくすに拘らず、其國人口を養ふこと能はず、遂に其人口の一部を国外に出さざる可らざることをさす。其國人口を養ふの道存するに拘らず、方法を以て人口過剰なりといふは意味をなさざるなり。……諸國が植民に熱心なるは其國人口加

78

其若し人衆がにして或	てよと教へんた。3)	福を了たすを征服	以て彼等自身の手	に彼等自身の手	は水、新しき地	走の群から追つ拂	、若芽の人々は父	くたつて来たとき	か愈々至定出する	未だ行くこと出	し行くこと出	多数の人々を扶持	居住地が「人々を扶持	、古くは	分別をすすむ如く	その繁殖と共に集	例である。蜜蜂が	トの分は	る、アブラムと口
------------	------------	----------	----------	---------	---------	----------	----------	----------	----------	---------	--------	----------	------------	------	----------	----------	----------	------	----------

過剰な故にある」と。(植民政策綱要 P.19-20) 併し「百万人を遣はせしむる所は人口過剰、其の在りてを以て、その遣はるべき百万人の行つては、英國に於て大戦後の失業と除隊兵士の海外移住の間に関連して Oversea Settlement Office (1919) を設けし、又日本政府が海外興業株式会社を設立し、ラヂアル行移民に對し六十万の年額補助を爲すによつて見らる。

1) 「アブラムと偕に行きしロトは羊牛及び天幕をもてり。其地は彼等を載せし俱に居し居ること能はざりて。彼等は其所有のかりしより二俱に居ることを得ざりて。斯有りしかばアブラムの家畜の牧者とロトの家畜の牧者の間に競争あり。アブラムロトに言ひけるは我等は兄弟の人なれば、請ふ我と汝の間に及ぶわが牧者と汝の牧者の間に競争ありしむる勿れ。地は皆汝の前にありてありや。請ふ我を誰より汝の左に行かば我右に行かん。又汝を誰より我の右に行かば我左に行かん」と。(創世記第十三章 五-九節)。

2) "Les colonies d'essai" (Benancy) — 本書第五章 P. 参照。1591年既に Botero なる人が「植民を以て蜜蜂の分群にたとへたる」と。(Roscher, Kolonien u.s.w. S.1. 脚註)

ATHENA (4)  
3) 葛野大内共記。アラス人口の整理。P.45.

9

79

農業地方

28

地味の上に数限りなく住み得るもの  
 であるには、人類は悉く其の養育地  
 たるエデンの園<sup>の外の</sup>を<sup>サレた</sup>ア  
 トム<sup>の傾斜が甚だしい</sup>の<sup>その先程地たる</sup>沃野に<sup>は</sup>出  
 ず<sup>下る</sup>た<sup>る</sup>ん。然るに斯くせし  
 る人類が全地球上に散布するに至  
 るは一定地域の人口は人口過剰が  
 起り得たからである。  
 人類の文化進歩農業發達すれば、  
 地域の不足は技術の進歩を以て補は  
 れる。農業は同一面積に於て狩猟牧  
 畜より多くの人口を支持し得るが  
 、土地より多る人口制限は<sup>土地の</sup>工業に  
 比すれば<sup>は</sup>産業の性質上<sup>は</sup>早く人口を<sup>制限</sup>  
 する<sup>力</sup>は<sup>小</sup>い<sup>から</sup>る。  
 故に<sup>は</sup>得る<sup>に</sup>限る<sup>に</sup>農業の生活資料が大  
 部分<sup>は</sup>食物により占めらるゝが政  
 治、<sup>経済</sup>防衛制人口に<sup>増加</sup>する<sup>際</sup>に  
 限りの行はるゝこと少く<sup>は</sup>従つて人口  
 過剰を生じ易い。  
 且つ農業は<sup>は</sup>比較的永  
 続的影響を有する。  
 故に<sup>は</sup>農業國若くは  
 農業地方の移住多き所以である。<sup>2)</sup>

1) Camman, Wealth. P. 53. 伊藤 説 P. 94.  
 2) 独逸の移住統計に付 北独逸及西北独逸を農業地方とし、中部東南、西独逸及びハノーファー諸邦を工業地方とし、  
 西南独逸を混合地方とす。地方別移住者百分比中その各々の占める割合は、1871—1875年に於ては、順次に 55.0 ~~25.6~~  
 19.4 25.6 ~~19.6~~ 漸次同傾向の<sup>変化</sup>を<sup>経</sup>て、1906—1910年に於ては、<sup>それぞれ</sup> 40.8 35.8 23.2 となつた。  
 ATHENA (4) <sup>の</sup>方<sup>が</sup>  
 (Waltershausen; ~~前~~ Auswanderung, H. d. S. 4te Aufl. S. 96) <sup>は</sup>農業地方の移住者多きと共に、<sup>漸次</sup>同地方  
 にも<sup>は</sup>集中せる<sup>割合</sup>人口が、<sup>漸次</sup>相対的過剰の状態に入つて<sup>は</sup>示す<sup>味</sup>は<sup>り</sup>可<sup>定</sup>を示す。

30

80

29

資本主義経済

恐慌及び不安

南工業地帯資本主義的発展を遂げた国又は地方は最も稠密なる人口を有し得る。恐慌は一時的不過剰を来す。併し不景気と景気とが周期的順環を繰り返す限り過剰人口はやかた自国内に於て消化せられず。左に示す如く、移民が特殊なる手段を以てカルクスの言ふ如く過剰労働力の進出に従ひマルクスの所謂相対的過剰労働人口は益々大となるが故に、周期的恐慌による産物餘剰の減少、失業率の上昇、モ多量に著しくなるであらう。又不景気の襲来が特殊なる原因に基くとき、例へば

伊太利の地方別移民統計によれば 1876-86 1887-90 1901-09 下表の如し (Waltershausen 前掲書 p.100)

部	1876-86		1887-90		1901-09	
	移出住者数(A)	指数(B)	A	B	A	B
北部	92,031	100	151,539	164.7	20,812	229.1
中部	14,832	100	31,603	213.1	107,913	727.6
南部	27,911	100	86,528	310.0	278,521	999.9

北部伊太利では比較的工業の発達せる地方たる中部に比較して、農業地方たる南部に於て移民の激増を見え、而して是は又前に於て北部地方に於て人口過剰が甚大なるが故にあり。十九世紀末以来交通機関其他の発展により、資本主義的経済の範囲に入り易くなり、移民は其の人口過剰状態による原因を自覚するに至つたのである。移民は人口過剰の原因を避けることの意味が活潑な行はし得ない

ATHENA (4)

31  
81

産業革命の

的 廠 物 業 の 取 扱 を 奪 つ た 。 世	工 業 の 發 達 は 半 農 半 工 の 中 世	は 農 村 人 口 を 過 剩 な ら し め た 。 株	著 例 と す 。 農 地 の 包 收 。 ( <i>enclosure</i> )	本 主 義 化 。 殊 に 三 條 農 業 革 命 は その	剝 削 の 多 因 と な る。 封 	る こ と の 過 渡 期 に 於 て 過 剩 人 口 の 過	社 會 の 新 生 產 力 に 至 る に 没 入 す	の こ と は、 農 業 の 急 激 な 變 革 は、	の 歴 史 的 的 進 歩 に 堪 え な ら な か つ た 。 如 く は、	に 於 て 優 越 的 地 位 を 占 有 す 。 外 に 對 し	の 幼 稚 童 の 理 由 に よ り 之 等 の 吳	天 然 資 源 の 缺 乏 、 技 術 及 び 資 金	り の 奪 回 せ ら れ た 。 如 き 、 或 は	我 國 の 發 達 に よ る 競 争 の 激 化 に よ	は 外 子 の 競 争 中 擴 張 せ る 發 達 が
---	---	---	---	--	--	--	--	---	---	---	--	--	--	---	--

1) マルサスは「現代農業界に於て商品需要の变化より先ず不平等」と認められ、<sup>1806</sup>「1807年の轉住」が彼をして「地味の変化と轉住の關係を記述する。彼の人口論の第四版は一節を挿入せしむるに至りし事をもも知らぬ。」— *Bonar, Malthus and His Work, P. 147* 佐久間次人口地理 P. 114—115。米田南北戦争の事件の記録に於て Lancashire 縣に於ける教示が失われた。此等が超過人口の轉住後助の要求を社会に牧畜を以てした。—— 羊に代るに鹿を以てした。如くは在り高地の強人による諸地方は遙か小早から三版の變遷を経て、その結果は常に益々少く人数の稀薄な使用に於てあった。投げ出された人々は二途を選択すべかりしなり。一は付地への轉住であり他は地味への轉住であった。—— *Bonar, 前出書, P. 189—190.*

ATHENA

82 續

31

英國政府及地方自治体は、  
 民政の振興に努め、移住  
 民の奨励補助費を支出した。  
 労働組合も亦失業救済、賃  
 金維持の爲めに移住を奨助  
 した。<sup>3)</sup> 一七六三年以前の英  
 國移住の原因の宗教的政  
 治的不一致を特色とせし、  
 是の後には失業及  
 人口過剰の危惧が之に代

工業上及び農業上の変革は、  
 労働階級中の比較的企業  
 的富者の一人が彼  
 等に航海費を給し、  
 是れで植民地に移住せし  
 め、遂に至るに、  
 而して、  
 植民地土地會  
 社、  
 一般に自由放任の時作思  
 潮に支取せらるるに拘ら

1) Knowles, L. C. A. The Economic Development of the British Overseas Empire, P. 91.  
 2) 同上 pp. 91, 95. ~~同上 P. 91~~  
 3) 同上 P. 91. 英國が北米及び西に伴つた錦繡花徳の杜絶に基き Lancashire 地方等に多くの失業を起  
 した時、~~社会各階級~~ 工場主を除く社会各階級(労働階級を含む)の多くは「過剰人口」特征の工場又は國民的援助を要  
 するの聲が高つた。(Marx, Das Kapital. Ⅱ Bd. I, S. 510)